

ひと粒のモミ

(銀河グラフィティ 信州人物風土記・近代を拓く)

第1章 大地

軽井沢の冬はことにきびしい。その目も晴れあがった空には雲一つなく、雪をかぶった浅間山が、さながら一枚の絵をみるように美しかった。

豊次は掘り炬燵にすっぽりと身体を入れてあたたまりながら、まだ、そばに置いたままの大きな茶封筒のなかから手紙の束をとり出し、一通、一通を読みかえすのであった。それは何度読み返しても飽きることのない手紙であった。

あけましておめでとうございます。

もう寒さもだいぶきびしくなってきましたね。

私は、亀津小学校五年三組の窪田京子です。

私は、一月三十日の道德で、一つぶのモミ を勉強しました。

荻原さん、どうもありがとうございます。

30年間もアイデアを生かし、失敗をしても、はだから悪口を言われてもくじけないでいいお米を作るうとしてはげんでいた。

私はそのえらさに心をうたれました。

もし荻原さんがいいアイデアを作らないうちからやめていたら私達日本全国の人がお米をたべられなかったかもわかりません。

私も荻原さんのようにみんなのためにつくしていく人間になりたいです。

私の住んでいる所は 徳之島 といって南の小さな島です。

小さく白鳥でも公害はないし、空気はすみきっています。

徳之島の特産物は、そてつ・さとうきび・犬島つむぎ・ハブ・バナナ・鳥みかんです。ハブというのはヘビで、ハブにかまれると二時間しか命がもたないという先生が言っていました。

荻原さんもいっぺんこちらの方へ遊びにきてくださいね。

荻原さん、物価ねあがりでだいぶ生活もしにくくなりましたね。

でもみんなにまけずにがんばってくださいね。

ながいきしてね

では さようなら

荻原豊次さんへ

窪田京子より

2月2日(土曜日)

どうもありがとう

小学校五年生というのに、しっかりした字だ。徳之島ってどんなところだろう。出来ればいってみたいところだがそれもあるまい。そんなことを思いながら、かじかむ干を片方ずつ炬燵に入れて、一枚一枚を読んでいきながら、豊次の心は一足先に春を迎えたようなあたたかさに包まれるのであった。

「これでいい、これでいいんだ。俺はほんとうにしあわせ者っていうもんだ、みんなありがとうよ」

会ったことのない子どもたち、勝手にその子どもたちの顔を思い描きながら、もういち

ど「ありがとうよ」と小さく声に出して言うてみる。

死出のいいみやけだ。俺はしあわせ者、と思うとき、ふっとこみあげてくる熱いものを、豊次はあわてて水漬といっしょにすすりこんだ。

昭和48年、NHKは“大地に生きる”と題して、不屈の精神で一農民が「保混折衷苗代」という苗代づくりを考案した経過をとりあげ、4月2日から28日まで〈早おきどり〉という番組のなかで、24回にかけて全国放送をした。この放送を道德の時間にとり入れ、人間の生き方を勉強したのが鹿児島県徳之島町立亀津小学校であった。

担任教諭はこの放送を聴いたあと、生徒に感想文を書かせ、それをそっくり豊次あてに送ってきたのであった。

「ひと粒のモミ」というタイトル、まさに一粒のモミがまいた種は、大きな波紋となって子どもたちに感動を与えたのであった。

豊次にとっては何よりのプレゼントであった。そしてこの頃の豊次が、一番しあわせであった。

失敗、挫折、離反、嘲笑、それらを越えて、豊次はまさに“農民の神様”のような存在でもあったからだ。しかし、だからといって決して心おごる豊次ではなかった。ただしみじみと、自分で自分を納得させていたのだ。

徳之島の子どもたちの手紙が入った大きな茶封筒は、少し汚れて小さなシワが目立つ。豊次が折々に読んでいたことが、その汚れによって良くわかる。

そんな茶封筒と、おだやかな表情の豊次とを、家に残り百姓仕事の後継ぎとなった二男の正次は、妻の三知子と共にいつもいたわるようにみていたという。

第2章 高冷地

豊次は明治27年9月20日、長野県北佐久郡古宿の農家に生まれた。父能信(よしのぶ)母すぐの末子で、豊次には長男寛治、次男潔、三男浪重、四男国人、五男茂作、その下に長女ウメジと六人の兄妹がおり、そして彼は、長女誕生の十年後に六男として生まれている。

生家は天長3年(826)に、先祖がこの地に住みついたという旧家であり、明治維新前後は、郡長などの役として代々部落に貢献している。

旧中山道にそって建てられている家は「㌦」の屋号で、馬宿として羽振りをきかせていた。現在でこそ軽井沢は“世界の軽井沢”あるが、当時は決して町全体が豊かといえる暮らしではなかった。高冷地で農作物はとれない。多くは炭やきを生業としていた。交通といえば山道を馬で・・・という時代、馬宿の業は、日銭の入る商売として人々から羨ましがられていた。

山伏修験者であった能信は、威厳というか一節ある人物で「ヤマトさま」「ヤマトさま」と、荷受人、荷渡し人のどちらからも頼りにされていた。生家はまた地主でもあり、馬宿経営も、沓掛の宿屋に育った妻すぐの腕前もあって、交通不便な場所のわりには順風満帆であった。

しかし、明治になって宿駅制度が廃止され、馬宿の収入がなくなると、生家ヤマト屋の生活は農業でたてていかなければならなくなっていた。

そんな析に親類先の酒屋から借金の申し入れがあり、人の良い能信はその金を用立ててやる。これが運悪く貸し倒れとなり「ヤマト屋」は倒産。地主から小作人へと転落し、苦しい生活かはじまった。

にわか貧乏が原因ではないだろうが、豊次の兄姉たちには短命の者が多く、浪重、国人は二十代で、茂作は小さいときに死亡、またたった一人の女の子ウメジも成人することなくこの世を去っている。

長男寛治にはいろいろのエピソードがある。彼は家の暮らしが好調のころ育ったのが原因してか、なかなかの文学青年であった。少年時代には教育勅語を漢字のまま読んだなどと村人から注目され、青年期は島崎藤村から可愛がられたり、どちらかというと山伏修験者であった父の実直な生き方とはその方向が違っていた。だからというわけではなかっただろうが、荻原家のあとを継いだのは二男の潔、しかし、彼も小作のみでは生活を支えられず、日露戦争に応召し、帰ってから国土計画につとめながら農業に従事したという。

潔は子どもに恵まれなかった。同じ古宿の遠縁にあたる家に、とらのというしっかりした娘がいたのでこれを見込み、その娘を養女として迎えた。やがて末弟の豊次とめあわせて後継者とするが、彼ら二人の結婚は大正八年、まだまだ先のことである。

豊治は兄たちとは違い、はじめから貧しい暮らしの中で育った。

身体も小さく、腕白どもと遊ぶというより、むしろ本を読む方が好きという少年で、ひまさえあれば本を読んでいた。

また、豊次の身体は華奢で、とても百姓をやるようなタイプではなかった。機械化のすすんでいる現在からは想像もつかないことであるが、ほとんどが手作業であった昔の農業は、力自慢、腕っぶしのつよい者でないと百姓には適さないと云えた。

ことに軽井沢などは凍土地帯で、斜面のきついところである。体力、脚力、腕力、そのすべてが要求される。

豊次はこの点すべてにマイナスであったから、百姓仕事には抵抗があった。兄のもとで農業の手伝いをしながら、「百姓の仕事はこうしたものでいいのだろうか」と煩悶していた。豊次の優れた知力はこうした疑問と正面からぶつかっていったのである。

軽井沢は標高九百メートル以上の高原で、平地よりも二ヵ月寒暖の差があり、春が遅いため、苗の育ちがおくれ、当時の収穫は十アール三俵足らずという貧作の地、農家の生活は貧しく惨めなものだった。

大正4年は、全国的に好天に恵まれ豊作の年だった。米価は暴落したが、高冷地の軽井沢でも米はいつもの年よりたくさん穫れたため、潔はその豊作を喜んでいて。そんなとき潔を見て、豊次は、「小作料にとられればいくらも残らないではないか、例年の倍の収穫をあげれば農家の暮らしもずっと楽になるのでは・・・」と、つい言ってしまったという。

それは潔とて、否、軽井浜中の百姓の誰もがいつも思っていることであった。「お前は何もわからないからそんなことをいうんだ！ これ以上収穫をあげる自信があるなら自分で全てをやってみろ！」百姓に嫌気がさしていた潔は、そう言うとさっさと百姓をやめ地元の会社づとめに専念してしまった。

豊次21歳の春、全面的に荻原家の農業をひきうける結果となった年である。

第3章 苗代

大正3年、はじめて軽井沢に電灯がついた。まるで魔術のような電灯、豊次のおどろきは大きく、ただ感心し、「ああ有り難いものだ、偉いもんだ」と、出来ればこうした電気の仕事に就きたいとしきりに考えた。

だが兄の潔は、いま豊次に農業をやめられたら困るという思惑があり、「電気の仕事は危険だから、絶対にいかん」といって許してはくれなかった。

農業からの転職を止められ、百姓仕事に全面的に係わるようになった豊次。若いが、しかし痩せて小さい身体の豊次には体力を必要とする農業は不向きであった。それに加えて軽井沢は高冷の地、しかもやせた火山灰土であり、もともと稲作には適さないところであった。

だが、どうにかして家中のみんなが食べられるくらいのお米は穫りたいものだと、生来の研究心が頭をもちあげてきた。

しかし、彼には一冊の農業書があったわけでもなく、相談しようにもその技術を教えてくれる人も皆無だった。農業においては生き字引きのような精農家として知られていた徳太郎という人も豊次の疑問に対して、「見て学ぶことだ」と何も教えてはくれず、すべて自分一人がたよりという状況であった。

豊次はひたすら試行錯誤を続けるばかりだった。誰に何と言われようと、これと思うことはやってみた。人はそれを「豊次の思いつき」として嘲笑することもあったが、コツコツと一人で研究し、あれこれと試してみるのだった。肥料といえば、堆肥か青草が主だったが、“硫酸”という肥料が出来ると、早速東京の間屋から取り寄せて使ってみた。金を出して肥料を買うなどということは考えられないことであったから、まわりからは大いに顰蹙をかった。

とらの父も「それくらいで効くものかい」と批判的であったが、秋になるとわざわざきて視ていくほどの関心も集めていた。

そのうち、“石灰窒素”が出来てきた。豊次はわざわざ直江津まで行って二袋買って帰り、これを使ってみた。

こうした熱心さ、努力が実って思ったよりの収穫があがっていくと、豊次をみるまわりの目も少しずつ変わっていった。だが、軽井沢の平均気温は8.5度である。育つときを得ても急速に秋がくると、それは必ずしも収穫にはつながらず、冷害が宿命的なものであることに変わりはない。

工夫をしては失敗し、その失敗を工夫につなげていくのだが、研究も実験も特別の場でするわけではなく、生活の糧となる場での取り組みだけに徒やおろそかに出来ることではなかった。

「とにかく寒くなる前に稲の花を咲かせなければならない。そのためにはまず苗を寒い時期に育てることしかないのではないか……」

この発想が豊次と苗代づくりとの闘いになるのである。それは実に三十年間という長い歳月にわたる闘いであり、その間、彼が苗づくりに成功したのは数えるほどであり、失敗のたびごとに村人たちからは冷たい目でみられる屈辱の歴史でもあった。

ことに失敗で苗がなくなったときなど、近所の農家に頭をさげて「不足苗」をもらいにいくのだが、度々のことなので豊次には苗のくれ手もなくなっていった。

苗専業農家があるでなし、「苗半作」といわれるくらいだから、苗づくりが満足にできない百姓は、「ろくでなし」などという言葉で馬鹿にされていたものである。豊次はただ耐えるしかなかった。

しかし、こうした豊次を陰で理解し応援してくれる人もいた。

「苗を持っていつてはやれねえが、せぎのところへ置いとくで、わからねように持ってきな」

そう言って束ねた苗を堰のところへ置いてくれた。置いてくれる方も暗くなってからのこと、その苗をとりに行くのは夜が更けてからだった。まっ暗ななかをそれこそ昼間の勘だけで畦道をいく心細さ、まるで盗みをするような屈辱感に思わず涙を拭う年が続いた。

だが豊次は不屈だった。コツコツと観察日記をつけ、憑かれたように研究と実験を繰り返すのであった。

そんな苦闘にあえぐさ中の大正8年、豊次はとらのと結婚する。

次兄の養女として同じ家に寝起きし、日頃の豊次を良く知るとらの…。気性のしっかりしたとらの、それからの内助の功は大きかった。

高冷地の軽井沢は農作業の時期は短く、したがって共同作業に頼ることが多い。お互いがゆいという立場で協力しあうのだが、このゆいには豊次よりもむしろとらのの方が歓迎されるむきがあったというほど、とらのは良く働き、夫を支えた。

豊次ととらのの間には、女四人、男三人という七人の子どもが生まれるが、彼の晩年は、長男義吉が家業を継がず、二男の正次が農業後継者となっていく。

義吉と正次との間には三人の姉妹がいたが、彼女たちも、失敗を繰り返す父豊次や、それを助ける母とらと一緒にゆいや農作業を一生懸命手伝った。また幼い正次なども農繁期には駆り出され小さい頃から代かきをする馬の鼻取りまで手がけたという。

第4章 蠢動

豊次の熱心さは、単に米づくりだけではなかった。養蚕に、また野菜の栽培などにも積極的な意欲をみせた。その意欲は「百姓はただ働けばいい」というものでなく、考える農業経営にあった。

自分の経営する農業のなかで、不足の部分を補うものは何だろう、そうだ！畜力にたようろう、と豊次は馬を買うことにした。

必要にせまられて買う馬だが、その馬もどこの産のものでも良いというのではなかった。わざわざ千島の馬を買った。

千島の馬は内地の馬より小ぶりでロバのような体形をしている。餌の量もすくないし、第一小柄の豊次にしてみれば扱いやすい点があった。自分のハンディキャップをプラスにかえていく精神が豊次には多分にあったのだ。

ところがこの馬がちょっと変かっとな馬だった。仕事はよくやるのだが野性的で気性が激しく、時によっては跳ねて暴れまわり、とても豊次の手に負えない状態になることもあった。せっかく耕しても、そこをまたふみつけてしまうような、気に入らないと芽を出した畑の作物を荒らしてしまうような、人間顔負けのいたずらもやってのけた。

だからといって憎いわけはなく、この馬は豊次になつき豊次を助けてよく働いた。

豊大の馬の使い方はうまかったが、決して代かきは丁寧ではなかった。丁寧にすることは「げーむねえ（無駄なこと）ことだ」という考え方だった。人一倍凝り性のくせに、手を抜いていいところは抜く、という徹底した合理主義的な考え方も持っていた。

馬耕の場八目、鼻取りと後取りという役が必要とされたが、やがて後取りのいらぬ機械（改良マンガ）がでてきた。

豊次は小躍りして喜んだ。後取りのない鼻取りは気ままでいい。代かきも意のままに出来るのだ。こうしたとき豊次は、たとえ家計が苦しくても機械類は無理をしてでも購入したという。人間の身体は単なる労働力としての肉体ではなく、家畜や機械の支配

力としての肉体であるはずという考え方だったのだろう。

養蚕にしても、一時に忙しくなることを避けて、掃き立ての日をずらすなどの工夫をし、労力の配分を図った。こうすれば上簇の時期もずれるのだ。言ってしまうとそれだけのことのようなのであるが、当時の農家にとっては考えてもみないことであった。

豊次はこうした点、実によく計算し、研究工夫してかつそれを実行に移していった。まさに頭をつかった営農方法であった。

そうした豊次ではあったが、努力をしても実らない苗代づくりへのあせり、そのための余分な出費などを考えるとたまらなかった。

野菜苗代にこぼした種モミが丈夫な苗に育ったのにヒントを得て温床苗代や、水陸折衷苗代を独自に考案(昭和7年)し、実験してみたが大きな成果は得られずこれをあきらめ、暖かい地方で苗を育ててもらおう委託苗代や既に関係されていた簡易苗代に切り替える(昭和12年)という有様。ついには精も根も尽き果てたように、ただ家の中で過ごすような日々が続いていた。

デッドロックに乗りあげたままの自分、その能力の眼界がうらめしかった。

苦悩する豊次をじっと見つめるとらの。とらのにしてみても、どうしてやることも出来ない苦しい日々であった。

或る日、それまで丹念に記録をしつづけてきたノートを抱きかかえて、豊次は風呂のたき口に持っていった。

「俺にはもうこれ以上考える力がないのか……」

それは声にならない悲痛な豊次の叫びであった。

「何もかも忘れるんだ！！もう駄目だ！！」

記録は豊次の分身であった。これを燃やしてしまうことは今までの努力が無に帰すばかりか、豊次の生き方そのものも否定することであった。

それは豊次の農業に懸ける夢の喪失であり、彼自身の死でもあった。

豊次にはもう出る涙もなかった。たき口にしゃがんでノートを火にくべようとする豊次。そこへまるで虫が知らせたように外から帰ってきたとらのが駆け寄った。

「……せっかく、せっかく何年間も苦しんできたんじゃないやありませんか……」

豊次の苦しみはとらのの苦しみでもあった。放心したような豊次、黙ってお茶をいれるとらのの頬に熱い涙があふれていた。

それから数日、豊次は長年間書きつづけた記録を、徹底的に見直した。そして、「昭和11年にやった方法が一番良いような気がする、もう一度一から出発してみよう」と心に誓った。

第5章 収穫

苗代のことだけを考え、それに挑む豊次の日々が続く。そして委託苗代にしてから久しく使うことのなかった板や、障子框を出して、水田の一部を苗代地とし、そこにわずかな芽を出した種モミを、床面に平らになるようにすり込み、焼きモミガラをまき、その上から油紙をかぶせた。

最初、水は溝だけにたたえ、苗床にはかぶせない陸苗代状態にしておき、本葉が二葉半になったら油紙を取り除き、水苗代とする。そんな水陸折衷の苗代と簡易苗代との折衷を考えての挑戦だった。

風の吹く口は油紙が風で飛ばされないように見て回ったり、また雨が降れば降ったで油紙が床面にくっついていないだろうかと、心安まる日がなかった。

豊次は自分自身のことを「物好き」と言っていたが、夜も寝ずに苗代にへばりつく豊次の姿から単なる物好きが昂じているのではなく、相当な確信を持ってこの実験に挑んでいるのだと妻とらのは直感した。そして夫と共に苗代を見回ったりして苗から目を離さないようにしていく。

この方法は大成功で、収穫時の成績は上々だった。昭和17年のことである。翌18年は、思いきって苗代田のうち半分を焼きモミガラをかけずに育ててみた。その結果はかけたものとあまり差がなかった。19年は村でも少なからず関心をよせていた五人が、豊次にこの方法を教えてほしいと言ってきた。豊次は嬉しかった。熱心に話し、指導を惜しまなかった。ところがこの年は雨が多かった。どんなに待っても芽が出てこない。

「豊次さ、どうしたずらな、俺ちじやあ芽が出てこねえだよ」

「大丈夫だよ、雨でおくれているが、じきに芽は出るから」

豊次は本当にそう思っていた。だが雨で油紙が泥にべっとり張りついてしまい、モミはくさっていたのだった。

雨の晴れ間に苗代を見にいく豊次、あまりにも悲惨な苗の様子に思わず田の畦にすりこんでしまい、しばらくは腰がもちあがらなかったという。とらのもまた育たない苗の様子をみて呆然としていた。思い直したように立ち上がる豊次、重い足どりに肩をおとして歩く豊次のうしろに従いながら、とらのは慰めようもなかった。芽ぶく前のから松林からもれる陽が涙でかすんで見えなかった。

被害者は自分だけではなかった。教えてやった五人がいる。またまた頭をさげて苗をもらい歩くのだが、苗が集まるまで、豊次もとらのも一睡もできなかった。そればかりか、頼まれて教えてやったことだったのに、「あんなこと二度とやるもんじやあねえ」とさんざんな陰口をたたかれた。ただ黙っているだけの豊次だった。

人生には思いがけない出会いがある。岡村勝政(県農業試験場、原村冷害試験地主任)との出会いは、そんな豊次にとってまさに神の思し召しであったのかもしれない。

岡村が県の奨励する「簡易温床苗代」の指導に県内を歩いていた昭和18年春、北佐久の現地講習会をひらいた場所が豊次の家の庭だった。

講習が終わったあと縁側でお茶を飲みながら話す豊次。その彼がこれまでいろいろに試してきたことを聞いていくうちに岡村は身体があつくするような感動をおぼえた。

「これは面白いアイデアだ！ きつといけるぞ！！」と岡村は直感した。岡村も農家の生まれで、冷害、苗の被害に悩む両親の苦労をいやというほど見て育った男だった。

この新方式の苗代について研究しあいながら二人は急速に交際を深めていった。岡村はこの方式を試験場の片すみで一人実施していく。

一介の農民と、試験地の主任がやることでは、同じ内容のものでも、やはり違う、またその広がり方も違った。

試験地と近くの農民律令徳雄との共同研究という体制も敷かれ、幾度かの失敗を繰り返しながらも豊次考案の苗代づくりは科学的な裏づけを与えられて、より着実なものへと近づいていった。

敗戦時のきわめて食糧事情の悪い時代で、食糧増産が国の至上命令ともなってい

た時代、農民は供出米の強制割り当てに悩まされていた。

「よく苗が起きる方法が出来そうだ」という耳よりのニュースはそんな農民たちにとって救いの神であった。

岡村はこの育苗法の科学的な裏づけができると「長野県農事試験場彙報」(昭和22年3月号)に紹介したが、関係の技師一人が目撃しただけで上司はもちろん、県庁の役人は誰も相手にもしてくれなかった。

岡村は何とかしてわかってほしいと、農林省開拓研究所にいた近藤頼巳に切々とした手紙を書いた。とうてい返事などもらえないだろうと思っていたが、近藤はすぐに返事をくれた。この時の嬉しさを岡村は忘れていない。

早速6月になって近藤は岡村をたずね、そして豊次と出合った。

岡村の説明をきいたとき近藤は「たいへんなことだ、大変なことだ」と思わずつぶやいたほど豊次の創案は偉大なものだった。大いに誉める近藤にむかって豊次はすこしもおごらなかった。

こうした豊次の人格にうたれ、また豊次の創案の技術的な裏づけ研究に大きな功績をもたらした岡村の業績を認め、近藤はこの新方式を「保温折衷苗代」と命名、同年12月、雑誌「農業及び園芸」誌上にそれらについての研究成果を発表し、全国へと普及させていく。

産みの親豊次、育ての親岡村、名付けの親近藤、この三人は後年、昭和28年農林大臣の表彰を受けている。

試験場には連日技術指導を受ける人が押しかけ、時にはバスが十台も並ぶといったような光景も見られた。豊次も乞われればどこまでも出かけて行って、快く指導をした。

九州まで行って足代にもならないようなときもあったが、そんなことに頓着する豊次ではなかった。教えてもらった御礼にと、お米を一升持ってきて置いていくようなグループもあった。農村は豊かではなかった。

明治大学で講演したこともあった。大学の講堂は、大勢の受講生で埋まっていた。

随分あちこちで講義をしたが、今日はいつもと少しちがった。俺のような者が、こんな大学の大講堂で講義をするなんて…俺の考えをまともに聞いてくれる人たちが、しかもお偉いさんが聞いてくれるなんて…。

あの失敗の連続のなかで、一体誰が今日のこのような結果を想像出来ただろうか。光栄とか感激とか、そういった感情よりも緊張が体内を走った。もともと饒舌ではない豊次である。

幾晩もかかって、原稿用紙にしゃべることを書いた。一マス一マスていねいに書きこみながら、これで相手にわかるだろうか、落としている項目はないがどうかと、何度となく読み直したりした。

障子紙に油をひいてつくった油紙の見本、失敗した時、成功した時、それぞれとおいた標本とまではいかないが、そうしたつむりの稲や苗を束ねたもの、それらが講堂の一角に置いてあるのが、演壇から見える。豊次は大きく深く呼吸をして講義に入った。

訥々と、だがしっかりと説明をする豊次、そこには気負いも、てらいもなかった。ただひたむきに苗づくりに励んできたことを報告するという感じの、淡々としたものであった。

研究心の強い人というのは、言い換えれば好奇心の強い人である。豊次が、頼まれ

ればどこへでも出かけて行って指導をした裏には、そんな性格もひそんでいた。

東京、江戸川に嫁いでいる次女薫のところへはよく出かけた。それは娘に会いに行くということもあったが、むしろそこを基点にして、何かを見にいったというのが本音である。あまり他人を誘うこともかく、豊次は一人でどこへでも出かけていった。

或る日、正次をつれて上京した時のことである。まだアメリカ兵を恐れていた時代に、立川基地まで出かけて、手ぶり身ぶりでアメリカ兵と交渉、飛行場を見学させてもらったことがあったという。こうと思ったら、自分の納得するまでやってみる人であった。

お酒は好きでよく飲んだが、歌はからきし駄目、この上ない音痴であったが、機嫌のよいときなど良く歌った。細かいことなど言ったことがなく、強い意志を持ちながら心優しい豊次だった。

昭和28年の記録的な冷害には、豊次の研究が遺憾のない力を発揮した。全国の農家は、豊次の忍耐と努力とに感謝して、米一にぎりを出し合い豊次の頌徳碑を建てた。

そのお祝いの日、粗末なワラ半紙に書いた「お礼の言葉」を読む豊次を見ながら、とらのは感慨無量だった。

苦楽をわけあった夫婦というのは、私たちのようなもののかを言うのかもしれない。身を裂くような苦労もあったが、誰でも行けるという場所でない園遊会にも連れていってもらった。いろいろの人たちの支えもあったが、夫豊次は、冷害や台風などの被害で困っている農家の人たちにこんなにまで喜ばれるようなことをした。そんな男と一生連れ添えて私はたいした果報者だ。とらのはそう思って、そっと涙をぬぐった。

雀のあそぶ豊次の家の前庭に建てられた集合所、そこには野良着のまま、気楽に農民たちが寄ってきた。いつどこからきても泊まれるように布団もおいてあって、農民たちはよく寄り合っては論議を交わした。

自分の子どもが育つ時期、子どもの世話や面倒を見ることが殆ど出来なかった豊次は、よく孫たちをかわいがった。小さい頃豊次の膝の中に入って抱かれ遊んだ孫たちは、身体の弱った豊次に優しくった。孫たちにいたわられながら、晩年の豊次は実におだやかだったという。

食べさせる米がなくて娘たちを売った昭和初期のような貧しい哀しい時代。より多くの米を作り、人々の生活を豊かにしようと努力し、保温折衷苗代を考案した男、懸命に生きた高冷地の一農民豊次は、昭和53年にこの世を去った。

(銀河書房)